夕焼け通信 1363号　2022.8.1
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）109

木幡智恵美

猛暑、コロナ5波（2）

七月の終わり頃からお盆前にかけて、家の外壁の塗り替えをしてもらった。同じ町内に住む塗装屋さんが、「換気扇が壊れてますよ」と言って来られてからのこと。えっ、いつも普通に使っているんだけどと思って外に出ると、室外フードが割れて半分になっていた。家を建ててから約三十年、家電製品などは不具合が起きると替えてきているけれども、建物自体に手を加えたことはない。ついでにあれこれ調べてもらうと、屋根との境に隙間ができていたり、壁に亀裂が走っていたり、結構痛んでいるようだ。お金はかかるけど、今やっておけば、余生を終えるまでは大丈夫だろうと夫と話し、直しや塗装をしてもらうことにした。

ところが、塗装にかかった頃が暑い最中。足場が組まれ、黒い覆いをかけられる。それだけでも暑さが増した気がするのに、いよいよ下塗りに入られる前の日、窓ガラスに塗料がつかないように、家じゅうの窓が閉められ、ビニールを貼られた。その夜、日中の熱が家じゅうに籠り、エアコンのタイマーが切れてからというもの、眠れやしない。いつもは、寝入るまでエアコンをつけ、その後窓を開けるのだが、どこも開けられない。扇風機は熱風を運んでくるだけだ。眠れない夜を過ごし、朝食を済ませてバイクで畑に向かった。

水やりを終えて家に帰りつくと、屋根の上から、「夕べ暑かったそうで、すみません」と塗装を施す職人さんが、声をかけてこられた。夫が話したらしい。いや、この炎天下で作業をされている職人さんと比べたら、家の中にいて眠れないなど言えた義理じゃないと思ったが、その日の作業で、二階の子ども部屋二室の窓は開くようにしてくださった。お陰で風が通り、それからは眠れるようになった。

それにしても、職人さんたちはすごい。この夏は、三十六度を超える日が六日間、ひどい時は松江で三十七、一度、大田では三十九、一度まで上がった。そんな日でも、外で作業をされたのだ。私にできるのは、麦茶やアイスクリームを差し入れることだけ。ふと、気づく。そうか、長男も毎日炎天下で作業をしているんだ。娘の夫の忠ちゃんもしかり。外で作業している人は皆、この炎暑は身体に堪えるだろう。それでも、休まず作業をしている皆さんにはただただ敬服するのみだ。

がらがら橋日記

宮森健次

真夏日

二十五度を超える真夏日であっても、予定していた草取りは止めるわけにはいかない。こいつだいじょうぶかいなという不安顔の仲介者に、「絶対無理しないでください」「必ず休憩して水分をこまめにとってください」と口酸っぱく言われながら、いざ灼熱の草場に赴かん、とねじり鎌片手に向かう。たいていの場合が、伸び放題の草に「さすがにこれはまずいだろう」と焦りを感じてからの依頼なので、なかなか手強い現場が多い。すくすくと育ったオオアレチノギクなど乾ききった表土をがっちり掴んで容易に抜けてくれないうえ、松江市のペラペラしたゴミ袋ごとき簡単に突き破る。

「いつの間にかこぎゃんことになってしまいまして」利用者も半ばあきれ顔だ。第二次梅雨明けは、より繁茂した草取り明けとなっている。

中腰で抜いていて腰や膝が痛くなると、手と膝を地面に着いて、草の中に這いつくばるようにして手元の草をブチブチバリバリと抜く。空気を三十五度に上げる日差しは地面をそれ以上にしているので、熱い鍋でも触っているようでゴム手袋の中はすぐに汗で濡れてくるし、顔から噴き出る汗はボタボタと眼鏡を伝って土の中に吸い込まれていく。日差しはまるで圧力があるみたいに背中を押す。

子どものころ、日雇い労働をしていた叔父が言っていたのをふと思い出した。

「日雇いはいけんわ。罪人みたいな仕事させーけんのお。」

炎天の下で、川に入ってヘドロを掻き出す仕事だったらしい。なぜこんな仕事をせねばならんのかと身振り手振りで嘆いたのだったが、どんな話も冗談混じりで笑わせる大好きな叔父だったので、時代劇みたく鞭を手にした役人に睨まれながら川底を這う叔父の姿を想像し、ぼくは大笑いしながら聞いたのだった。叔父は笑い転げるぼくを見て、満足そうな笑みを浮かべていた。

じりじりと焦がす太陽を背中や首筋に感じながら、ぼくはしばらく思い出し笑いに興じたのだけれど、もしかすると、叔父は笑い話にすることで耐えていたのかもしれないなと思った。

叔父の話を思い出したのは、端から見たら今の自分の姿は苦役に見えるだろうと想像したからだ。でも、実際はそれほど苦しくもつらくもない。いくつか楽しみさえ混じっている。暑さに慣れてきたと感じるのはうれしいものだし、ワークマンの熱中症対策グッズがなかなかで、いい買い物をしたという充実感もある。気がつくと、夏が去年ほど嫌じゃなくなっている。

30代フリーター　やあ、ジイさん。安倍晋三の国葬をどう思う。

年金生活者　安倍晋三の国葬だからではなく、だれの国葬であれ、国葬そのものに反対だ。聖人をつくり出す神の位置に国家を復帰させることになるからだ。権力を国家に再集中させることを認めるわけにはいかない。

安倍政権は国家に権力を集中することを使命として誕生した。憲法改正はその総仕上げとなるはずだった。現政権に国葬をさせることによって、彼は死してなおその使命を果たそうとしているように見える。

この政権の使命を最も鮮明に具現化したのが「地球儀を俯瞰する外交」「積極的平和主義」だった。戦後の首相で安倍晋三ほど外交・安全保障に力を入れた首相を知らない。

外交と安保は国の専管事項とされる。外交・安保を担えるということは国家の国家たるゆえんでもある。「国家は他の国家に対して存在する」（柄谷行人『世界共和国へ』）からだ。国家は他の国家に相対したときその存在理由を証明することができる。だから、外交・安保のための作業を重ねれば重ねるほど国家に権力が集まることになる。

外交・安保を通じて国家に権力を集中させようとした安倍政権の政策の最たるものが、それまで認められていなかった集団的自衛権の行使を一部容認する安保法制を制定したことだ。これによって憲法9条の理念は棄損され、国家権力を縛る憲法の機能は低下し、そのぶん国家の権力が増した。憲法改正はそれを全面化するものだ。

30代　国家主義的なイデオロギーが彼を駆り立てていたように思える。

年金　それだけではない。背景に国家からの権力の分散という世界史的な流れがあり、分散した権力を回収しようとする官僚や政治家の自己保存の欲求が働いた結果と考えることができる。

資本主義の高度化は、国家の権力の一部を個人、企業（市場）、国家間システムに分散させた。消費の過剰化が個人への、産業のソフト化が企業（市場）への、資本のグローバル化が国連やEUをはじめとした国家間システムへの権力の分散を駆動した。

それに対する国家の拒絶反応として、分散した権力の国家への回収をはかる動きが、ヨーロッパなどでの排外主義的な右派政党の伸長となってあらわれた。安倍政権もそうした流れのひとつとして誕生した。

30代　他方で安倍政権は経済最優先を強調した。

年金　アベノミクスは金融緩和と財政支出で景気を刺激する従来からの「大きな政府」政策を大規模化したものだ。つまり「より大きな政府」を目指す政策だった。これは「官から民へ」をスローガンに郵政民営化を進めた小泉政権の「小さな政府」政策とは対照的と言っていい。

アベノミクスの背後に見えるのは、経済を国家によって統制する思想だ。国家社会主義的な考えを持っていた岸信介を祖父に持つ安倍晋三はその思想の影響を受けたと推察される。彼は外交・安保の分野のみならず、経済政策でも国家への権力の集中を目指したということだ。「官製春闘」はその意志の明白な表明でもあった。市場原理に反するような経済政策をとるのをためらわず、経済への過剰な介入に走ったのが安倍政権だった。

その反作用がいま、インフレでも利上げできないという日銀の機能マヒ状態となってあらわれている。

30代　そんな彼が新型コロナの蔓延しているさなかに退陣した。

年金　こと感染対策に関する限り安倍の握る国家の権力より強い医療界の権力が彼の前に立ちはだかったからだ。

医師会や病院業界、製薬・医療機器メーカーといった医療界の力、私が「医療権力」と名づけるその力は、「人命」を第一に考える国民の要求に支えられ、新型コロ対策でその強さを見せつけた。マスク、手洗い、消毒、外出自粛、在宅ワーク、営業自粛など日常のすみずみまで国民の行動を制限した。戦後の日本で政治権力がここまでやった例はない。

安倍政権はほとんどその言いなりになるしかなかった。そればかりか、「言いなりになり足らない」と医療界や野党や国民から突き上げられた。

30代　国家第一を信奉する安倍にとって、コロナ対策を最高権力者である自分のコントロール下に置けないのは我慢ならなかったに違いない。

年金　それを巻き返そうとしたのが、学校の全国一斉休校という賭けだった。医療権力もまだ言い出していない大胆な措置を周りに相談せずに取ることで一気に主導権を取り戻そうとした。それは学校を混乱させ、保護者に負担を強い、子供にストレスを与え、それなのに効果のほうはあまりないという結果に終わった。

アベノマスクの配布も、医療権力の手ではできないことをすることで主導権を奪い返す意図が隠されていたと推定できる。そのさんざんな評判は繰り返し報じられてきたとおりだ。給付金などは政治権力の発揮のしどころだったのに、それがすぐにできるシステムになっていない官僚組織のもたつきで、大勢の怒りを買った。

安倍晋三はコロナに負けたばかりでなく、自らの支配下に置こうとした「医療権力」に敗北した。内閣支持率は急落し、持病を口実に2度目の政権投げ出しをするはめになった。

ニュース日記　841

中村　礼治

国葬に反対する